

新潟市ひきこもり相談支援センター令和5年度事業実績報告

令和5年度事業（=2023年4月1日から24年3月31日）について、相談件数等の集計と傾向を報告します。

事業所概要

開所日数は、火曜日から土曜日まで、祝日と年末年始を除く247日間。開所時間は9時～18時。職員数は4人（常勤換算では3.0人）です。

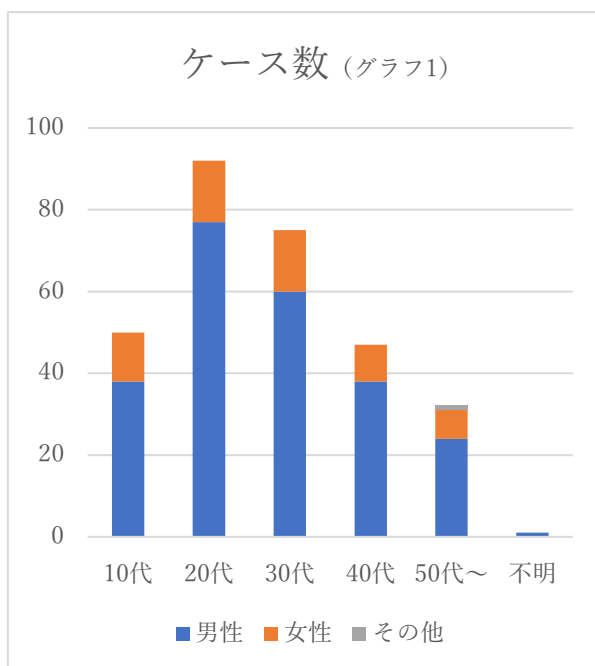
その他の情報はパンフレットなどをご参照ください。

ケース数とその内訳

ケース数（性別・年代別）

	10代	20代	30代	40代	50代～	不明	合計
男性	38	77	60	38	24	1	238
女性	12	15	15	9	7	0	58
その他	0	0	0	0	1	0	1
合計	50	92	75	47	32	1	297

表1



年間のケース数は297。表1はその性別・年代別の内訳です。年代では多い順に20代、30代、次いで10代と40代がほぼ同数でした(グラフ1)。男女比は8:2で、当事者が男性の場合が多いです。

表1のうち、当事者と相談を一度でもしたことがあるケースを表2に示しています。全体では297人中127人(43%)の当事者の方とコンタクトがとれたことがありました(面会に限らず、電話やメール等の手段を含みます)。また、特に20代以上の女性当事者の場合では、コンタクトがとれたケースが多くみられました。逆に、40代と50代以上の男性では、コン

タクトがとれたケースは2割以下でした。

40代から50代以上男性（と、もしかしたら10代の女性）に関しては、当事者とつながることを考えた場合には、支援の方法が変わってくるのかもしれませんが。

当事者と相談をしたことがあるケース数

	10代	20代	30代	40代	50代~	不明	合計	比率
男性	16	34	28	7	5	0	90	38%
女性	3	9	11	6	7	0	36	62%
その他	0	0	0	0	1	0	1	100%
合計	19	43	39	13	13	0	127	43%
比率（男性）	42%	44%	47%	18%	21%	0%	38%	
比率（女性）	25%	60%	73%	67%	100%	-	62%	
比率（全体）	38%	47%	52%	28%	41%	0%	43%	

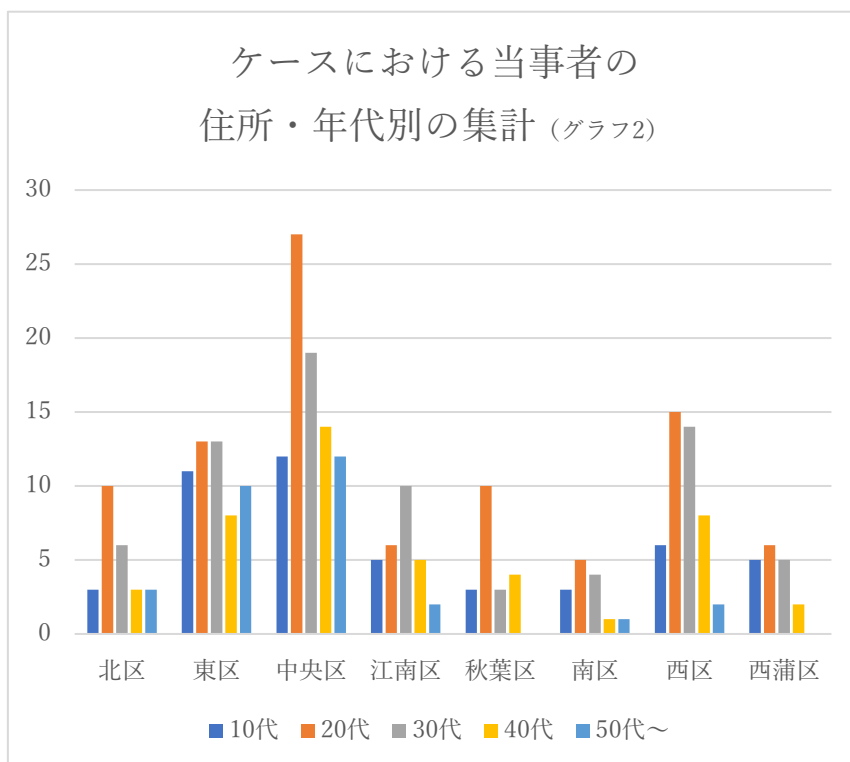
表 2

表 3 は 297 ケースにおける住所別・年代別の集計です。人口の項目は、新潟市 HP の令和5年4月の人口統計の値を転載しています。

ケース数（性別・当事者住所別）

	10代	20代	30代	40代	50代~	不明	合計	比率	人口	人口比率
北区	3	10	6	3	3	0	25	9%	71,550	9%
東区	11	13	13	8	10	0	55	19%	132,438	17%
中央区	12	27	19	14	12	0	84	29%	172,824	22%
江南区	5	6	10	5	2	0	28	10%	67,961	9%
秋葉区	3	10	3	4	0	0	20	7%	74,751	10%
南区	3	5	4	1	1	0	14	5%	42,971	6%
西区	6	15	14	8	2	0	45	16%	154,519	20%
西蒲区	5	6	5	2	0	0	18	6%	53,879	7%
市外	1	0	0	2	0	0	3	-	-	-
不明	1	0	1	0	2	1	5	-	-	-
合計	50	92	75	47	32	1	297	100%	770,893	100%

表 3



概ね人口比率と、各区のケース数の比率は連動しています。中央区では人口に対してややケース数の比率が高くなっています。また、50代以上のケースのご相談は、中央区と東区で68%を占めています。弊センターまでの距離によって、相談のしやすさに影響があるものと考えられます。

表4は相談手法について集計したものです。全体のケースのうち7割で来所面談を実施しています。訪問支援については2割弱（57人）のケースで実施しました。

相談手法

	延件数	実人数	割合
来所面談	867	209	70%
電話相談	623	189	64%
訪問支援	245	57	19%
所外相談	76	40	13%
LINE相談	58	21	7%
メール相談	33	22	7%
その他	47	28	9%
合計	1,949	-	-

表4

表5は訪問をしたケースのうち、一度でも当事者と面会できたケースを集計しました。基本的には当事者の了解を得て訪問支援は実施されます。10代から30代では面会状況は半々でした。40代では面会できなかったケースの方が多くなりますが、50代では当事者からの連絡を受けて実施する場合があります。面会できたケースが目立つようになります。

訪問支援における当事者の年代と面会状況（訪問時に一度でも会えたか）

	10代	20代	30代	40代	50代～	合計
面会した	7	7	7	2	5	28
面会なし	6	5	9	7	2	29
合計	13	12	16	9	7	57

表 5

新規相談者

ここからは令和5年度の新規相談者についての集計です。

新規相談者（性別・年代別）

	10代	20代	30代	40代	50代～	不明	合計
男性	14	20	22	15	16	1	88
女性	8	5	3	5	3	0	24
その他	0	0	0	0	1	0	1
合計	22	25	25	20	20	1	113

表 6

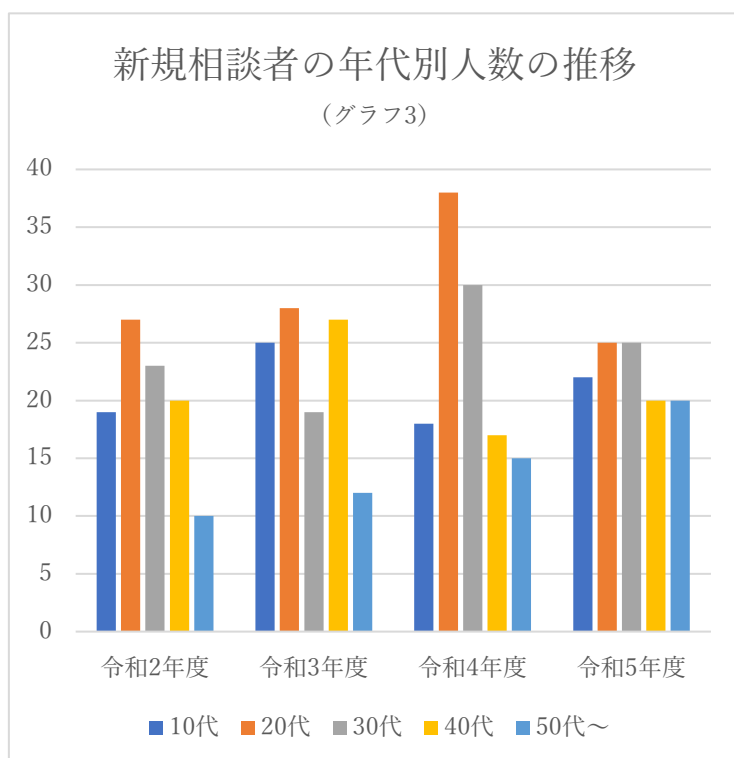


表 6 は新規相談者の年代と性別です。どの年代でも概ね同数のご相談がありました。

年度毎に見てみると（グラフ 3）、合計はほぼ変わりません（106 件～121 件）が、令和 5 年度に限っては 10 代から 50 代以上までまんべんなく新規のご相談をいただいたことがあらためて見てとれます。

表 7 は、当事者の年代別の初回相談者です。初回の相談とみなされる機会（電話やメールの場合を含む）でやりとりをした方を集計しています。

なお、初回の相談が面談で、親と当事者がいっしょにいらした場合はそれぞれで計上しています。

新規相談における初回相談者（それぞれ計上）

	10代	20代	30代	40代	50代～	不明	合計
当事者	2	6	6	5	7	0	26
親	18	15	14	10	2	1	60
兄弟姉妹	0	3	3	4	6	0	16
その他	3	1	4	5	9	0	22

表7

40代になると親が初回相談に来ることが減り始めます。50代以上の場合ではむしろ、当事者や、兄弟姉妹、その他（義きょうだいや他の機関の支援者など）が初回相談者になることがわずかに増えます。

来談経路

インターネット	41	41		
親	6	20	高校	3
兄弟姉妹	2		中学校	1
義兄・義姉	2		教育相談センター	1
その他の親類	10		教育機関	1
友人・知人	5		若者支援センターオール	1
こころの健康センター	3	5	若者サポートステーション	4
区役所	5		ハローワーク	1
行政機関	2		パーソナル・サポート・センター	1
市役所	1	14	障がい者基幹相談支援センター	1
役場	1		発達障がい支援センターJOIN	1
保護課	1		地域包括支援センター	1
児童相談所	1		社会福祉協議会	2
			医療機関	2
			紙で見た	1
			不明	12
				12

表8

相談者からの聞き取りを基に、来談経路を集計しました（表8）。全体の36%（41件）の方がインターネットで検索をしてご相談にいらしています。次いで家族などから情報を聞いてという方や、行政機関などから紹介されて、という方が多かったです。

居場所などのプログラム

弊センターでは居場所や家族会といった集まりを定期的で開催しています。ここでは実施回数などを掲載しました（表9）。

居場所

	回数	延人数	実人数	初参加数	頻度
居場所	48	207	22	14	週1回
女性の居場所	10	12	4		月1回
就労前体験	11	38	24		隔月＋不定期
e-sports 体験会	1	3	3		
家族会	5	54	32	-	隔月
合計	75	260	表 9		

関係機関との連携や技術支援について

当事者や家族との相談以外にも、関係機関との連携や技術支援を行う機会がありました。個別の事例に関するやりとりは延で244件、それ以外（会議体などへの参加）では49件、合計293件のやりとりを年間で行いました。手段としては表10のとおりです。

連携における手段

電話	127
訪問	136
来所	14
その他	16
計	293

表 10

また、やりとりのあった主な関係機関としては次のとおりです。

市・区社会福祉協議会、健康福祉課・保護課・障がい福祉課、地域保健福祉センター、就労移行支援・就労継続支援B型事業所、地域活動支援センター、大学、中学校、ケアプランセンター、在宅介護支援センター、医療機関（心療内科・精神科）、グループホーム（高齢者施設）、就労準備支援事業所、障がい者基幹相談支援センター、障がい者就業支援センター、地域包括支援センター、児童相談所、生活困窮者自立相談支援事業所、発達障がい支援センター、若者サポートステーション、NPO法人、フードバンク、法テラス、訪問看護ステーション、若者支援センター

（順不同）

リファーマ等

最後に、ひきこもり支援から次の段階へリファーマするなどしたケース数と、リファーマ先で
す（表11）。年代ごとに集計しました。表記が略称の機関がありますがご容赦ください。

リファーマ等

	10代	20代	30代	40代	50代～	合計
新潟サポステ	0	4	2	3	0	9
医療機関	0	3	2	1	0	6
障がい者基幹相談支援センター	1	3	1	0	1	6
オール	0	2	0	0	0	2
三条サポステ	0	0	2	0	0	2
JOIN	0	1	0	0	0	1
ウェルビー新潟センター	0	1	0	0	0	1
ソーシャルサポート	0	0	1	0	0	1
晴れる屋	0	0	0	0	1	1
就学	0	1	1	0	0	2
就労	0	2	0	0	1	3
合計	1	17	9	4	3	34
ケース数	50	92	75	47	32	296
割合	2%	18%	12%	9%	9%	11%

来所にいったもの

	10代	20代	30代	40代	50代～	合計
訪問支援からの来所	0	0	0	1	0	1
家族相談からの来所	0	9	5	1	0	15

その他の理由による終了

	10代	20代	30代	40代	50代～	合計
終了	2	5	1	0	1	9

表11

年代別では比較的结果が出たのは20代の方でした。就労を急げばよい、受診を果たせばそれが結果だ、ということをお願いしたいわけではありませんが、ひきこもり状態を脱する一助として新たなステップに進めたことについては、成果と表現したいところです。

その他の理由による終了については、相談者が自ら他の支援機関等への登録を行うなど、状況を好転させ得る前向きな要因がほとんどです。

令和5年度初回相談者の主訴（や、そのようなもの）

新規のケース113件について、相談者の言葉をまとめました。当事者の状態自体を語っているものよりも、何を求めている相談か、というところに注目して、相談記録からひろいました。おまけ程度ですが、ここ1年間の初回相談者が語ったニーズや困り感です。

10代

- 別世帯の本人と連絡がつかない（親）
- どう接したら本人の行動につながるか考えたい（親）
- すぐ診てもらえる医療機関の情報がほしい（家族）
- 私の相談先がほしい。訪問してほしい（親）
- 学校から紹介された（親）
- 本人世帯に関わる支援機関を整理、確認したい（支援者）
- 相談できる先を増やしておきたい（親）
- 助言や意見がほしい（親）
- 外に出るのは怖いですが、仕事がしたい（本人）
- アルバイトなどをして生活リズムを整えてほしい（親）
- 本人の状況が安定したので、今後のことを探りたい（親）
- いろいろ本人にさせてみたが、うまくいかない（親）
- 本人を傷つけない声のかけかたを探りたい（親）
- 本人の話を親身に聴いて導いてやってほしい（親）
- 私の話を聴いてもらいたい（親）
- 私がかんばらなければならないのだが、疲れた（親）
- すでに支援を受けているが、それが甘やかしに見える（親）
- 受診させたい（親）

20代

- 本人への就労支援が妥当な段階か悩ましい（親）
- 本人への関わり方のヒントがほしい（親）
- 私がどうするべきか考えたい（親）
- 受診して就職活動をしてほしい（親）
- 障害のある本人に対しての接し方を考えたい（親）
- 本人にどう声をかけていいかわからない（親）
- 本人の話し相手になってくれる人を探している（親）
- 外に出たり、外の人と関わってほしい（親）
- 本人が動き出すきっかけをつくってあげたい（親）
- 継続して相談できる場所を探している（親）

本人とケンカになってしまう（親）
本人の気持ちを聞き出してほしい（親）
医療受診の可能性を探りたい（親）
働けるようになりたい（本人）
またひきこもってしまいそうで不安だ（本人）
人と関わる機会が少ない現状が辛い（本人）
怖さがありつつも、なにかを始めたい（本人）
アルバイトを始めてみたい（本人）
親と本人とがすれちがい続けているので見兼ねている（家族）
本人を支え続けられるか不安だ（家族）
私たちへのあたりが強く、今は私が参っている（家族）
本人を連れ出してもらいたい（家族）
本人に向き合う準備が私の中でできた（親）

30代

在宅のパソコン作業の仕事があれば知りたい（親）
本人に代わって支援機関を探している（親）
働くことの話をするとう論になってしまう（親）
お互いに手が出てしまい、これではいけないと思って来た（親）
これまでの本人への対応を後悔している（親）
本人に来所面談の意向がある。つなぎたい（親）
本人の話し相手になってくれる人を探している（親）
私の相談先がほしい。抱え込んでおけない（親）
近い未来に経済的に困窮する懸念があり不安だ（親）
本人は就労意欲を口にするが、現実味を感じられない（親）
医療機関から紹介を受けて来た（本人）
話がしたい（本人）
他者との会話が、今の自分には必要かもしれない（本人）
家族から疎まれてる気がして、不安で仕方ない（本人）
現状をなんとかしたい。動き始めたい（本人）
よその支援機関との関係がよくない。居場所に参加したい（本人）
本人世帯の先行きを案じている（家族）
将来的な不安を感じている（家族）
本人世帯と関わってみてほしい。求めがある（支援者）
本人と、就労に向けた話ができる状態になった（家族）
ひきセンを紹介したい（支援者）

40代

外との関わりをまずは持ちたい（本人）
障害年金と訪問支援について知りたい（親）
誰にも相談できずにいた（親）
親の死後の本人の経済状況が不安だ（親）
あれもこれも心配で仕方がない（親）
本人との会話が、ある時期から激減した（親）
ケンカになる。参っている（親）
本人に向き合う準備が私の中でできた（親）
両親がいなくなったあとのことがなんとなく心配だ（親）
人の目が気になる。長く勤められるようになりたい（本人）
人恋しい（本人）
仕事に就きたい。趣味の活動を再開したい（本人）
今後の生活のために働かなければならない（本人）
このままひきこもってしまいそうで心配している（家族）
家族としてできることがあるか知りたい（家族）
ひきセンへの相談が必要と感じる世帯がある（支援者）
本人のこだわりがこのごろ強まっている（家族）
本人の力になりたいと思っている（家族）

50代以上

暴力や依存行為についてのアプローチを考えたい（家族）
なんとかしたい。人と話した方がいいと思っている（本人）
外出しないままではよくないと感じている（本人）
暴力があったときの家族の対応などを考えたい（支援者）
親の代わりに来た（家族）
将来的な漠然とした不安がある（家族）
短期の仕事をしたい。人の集まりに参加したい（本人）
社会復帰を目指すにあたっての助言がほしい（本人）
家族が疲れている。本人への相談の打ち明け方も聞きたい（家族）
ひきこもりつつある気がする（本人）
本人世帯が気がかりだ。本人の受診を目指したい（家族）
社会復帰したい。突然不安にかられる（本人）
専門の方の話が聞きたい（家族）
面談に同席してほしい（支援者）
死にたい。味方がいない（本人）

初回の相談時点で、すぐにでも働きたい（次のステップとして社会参加を目指したい）とするものは少数でした。また、たとえそうしたお気持ちであったとしても、実際に働ける状態か否か、自信があるかどうかというのもまた別の課題です。ひきこもり状態でなくするための手段を講じることを急ぐのではなく、継続して相談できる場所として機能することが大切なように思われます。

将来的な（しばしば金銭的な）不安が相談者から語られることが少なくありません。それがもし現実的に差し迫った課題——数ヵ月以内に住まいを失うおそれがある等——ではとりあえずはないのであれば、まずは、ひきこもらざるをえなかった理由が当然あったであろう背景や経緯に目を向ける必要があると思います。ひきこもろうと決意してひきこもる方はいません。どうか、ひきこもっている状態自体を不安がったり、嫌悪しないでください。ひきこもらざるを得なかった理由があってそうなっているだけの方（やその世帯の方）を、わざわざ困った人扱いしないでください。

望まずに、結果的にひきこもっている方が、「ひきこもり状態のままでいい」と願っているとは思われません。今のままでいいとは思っていないと感じている当事者の方が、必要としているものがなんなのか、相談をお受けしたいと思っています。

以上

■資料作成 2024年7月20日新潟市ひきこもり相談支援センター